

## ■第118回 み言葉の分かち合い

## ●第1朗読 シラ書3・2～6、12～14

この箇所は、親への思いは神への思いであり、神の思いに沿って生きることで心が整い、人生に祝福が流れ込むとの知恵が語られています。親を敬うことは神への服従となり、親への愛を神は決して忘れず、この結果として報いてくださいます。神は親に、保護・教育・導きを行うことを託しており、これらの実行と、子はこれを聞く義務があります。親の判断に従う理由は、①親は人生経験が豊かで知恵を伝えます。②子を愛して幸福を願っています。旧約では、掟に従うことで神との関係は回復されますが、赦しは一時的で不完全ですが、イエスの死による贖いは完全な赦しとなります。親から知恵を受け継ぐことで信頼や尊敬が得られ、神の思いに従うことで祝福が自然に得られます。親を尊ぶ言動をするには、自分が親なら何をしてほしいかを考え、してもらいたくないことはしない。これはマタイ7章12節の精神と合致しています。親を敬う心より愛が芽生え、平和が生まれ、幸せを実感し、祈りが主に届き、心が整います。十戒の「父母を敬え」を生活に応用した教えが「父の面倒を見よ」です。親への愛は神への愛の具体的な表現であり、隣人愛の基本となり、謙虚は神への従順、思いやりはイエスに倣う者へと成長させます。神は親を敬う姿を見ておられるので、その人を高め、罪は清められ、祝福されます。両親が亡くなられた後であっても、親への祈りや思いを続けることで、親を敬うことができます。

## ●第2朗読 コロサイへの手紙3・12～21

コロサイ書は、イエスの偉大さと救いの恵み、誤った教えへの警告があり、「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着よ」（コロサイ3・9-10）との勧めの後、この箇所になります。私たちは神に「選ばれ」、洗礼でイエスに属する「聖なる者」にされました。神の「愛」は、あなたを我が子として常に思っておられます。憐れみ（苦しむ人に寄り添う）、慈愛（人の役に立つ）、謙遜（相手を尊重）、柔和（傷つけない態度）、寛容（相手を受け入れる）。これらを「身に着ける」には、聖霊に委ね、日々み言葉に触れては黙想し、自らを省みます。相手の欠点を非難せず、忍耐して歩むことが「忍び合う」です。「復讐・報復はわたしがする」（ローマ書12・19）とあるので、怒りや中傷は、主に委ねて心を軽くし、無駄なエネルギーを使わずに歩みます。他者を赦すには、自分が主に赦され、受け入れられている、とまずは知ることです。愛は人を結ぶ「絆」であり「忘己喜他」（己を忘れ相手を喜ばせる心）で最善を尽くすとき「愛を身に着ける」ことができます。自己中心から、神との平和を第一に据えることで「キリストの平和が心を支配する」生活へととなります。救われて主の家族（教会員）にされた恵みに「いつも感謝」することを忘れず、「キリストの言葉を豊かに宿らせる」には「MyBible み言葉の宝石箱 実践編」を活用することで、聖句を手軽に蓄えられます。礼拝での歌う賛美が「詩編、賛歌、霊的な歌」です。言動の前には「主ならどうにされるだろうか」との仮説を立て行うのが「主の名によって」生きることです。妻は夫を尊敬し、支え合って家庭を築き、夫は妻を思いやって、優しく接します。子は親に従い、親は子を苛立たせず、主の精神に基づき養育し、（エフェソ6・4）いつも「ありがとう」「ごめんなさい」を忘れない。

## ●福音書朗読 マタイ2・13～15、19～23

ヘロデ大王は、占星術の学者たちから「ユダヤの王」が誕生したと聞き、不安と恐れから幼子イエスを殺そうと企てます。博士たちは夢でのお告げに従って帰路につき、この箇所になります。当時の学者たちは、占い師ではなく、天文学や哲学に通じた科学者・研究者たちです。ヨセフが家族を連れエジプトに逃れたのは「エジプトからわたしの子を呼び出した」（ホセア11・1）との預言の成就です。ヨセフは、アブラハムと同様に神の言葉に即座に従う信仰者であり、また、天使から「この子は救世主となる」と告げられていたので、迷うことなくエジプト行きを決断し、即座に行動します。神は常にヨセフの一家を見守り、危険を避けるために最適なタイミングで「エジプトへ逃げよ」「イスラエルに戻れ」と夢で告げられ、導かれました。ヨセフがユダヤへの帰還の恐れは、聖霊の働きによります。再び夢でガリラヤへと導かれ、「異邦人のガリラヤに大いなる光が昇る」（イザヤ書8・23-9・1）との預言と、メシアは「さげすまれる者」と預言（イザヤ書53・3-12）されており、新約では、ナザレは蔑まれた村（ヨハネ1・45-46）とあるので、これらが重なり合って、イエスは「ナザレの人」と呼ばれるようになります。

著者 蒲池 明憲